

した言葉とも読めます。父を殺すこと、テキストにおける父の名の場を空白にすることは、テキストにホモセクシュアリティを現前化させようとする、ワイルドの方法であったといえるでしょう。

ワイルド文学とアイリッシュネス

薩 摩 竜 郎

前に一度、1997年のワイルド協会大会で、ワイルドの Irishness というテーマで発表の機会を与えられたことがある。90年代に入ってから、Irishとしてのワイルドに注目する研究が世界的に増えている感があったので、その現状と有効性を報告し、日本でもその方向からの研究がより活発に行われることを望むというのが、その時の発表の趣旨であった。そこで紹介した海外での研究の例には、Declan Kiberd の *Inventing Ireland* (1995) や Davis Coakley の *The Importance of Being Irish* (1994) などが含まれていた。今回の発表では、一部、当時の発表の内容を振り返ってそれを出発点にしつつ、さらに21世紀に入った現在のワイルドの Irishness の研究の動向と今後の可能性について考えてみたい。

● 90年代におけるワイルドのアイリッシュネスへの注目

ワイルドは自分の作品中でアイルランドに言及することはほとんどない。これが、長い間、ワイルドの Irishness が注目されにくかった理由のひとつである。この点は、アイルランドを舞台とする作品を書いた Yeats や Joyce、あるいは Synge や O'Casey といった作家とは事情が大きく異なっている。また実生活においても、二十歳で Oxford に進んだ後、ワイルドは意識的にイギリス人の振りをしていたと思われる節がある。そのため、アイルランド人としての面はいつそう目立たなくなっていた。たとえケルト文化を褒めることはあっても、自分の出身地のものとして正面から褒めるようなことは滅多にしていない（例外はある）。

しかし、ワイルドがオックスフォードに進むまでの多感な少年期・青年期をアイルランドで過ごしたことは紛れもない事実であり、さらに極めて Irish 的（あるいは Anglo-Irish 的）な人物であった両親からの大きな影響は、当然、考慮されるべき要素である。高名な医師であると同時にアイルランドの考古学・フォークロア研究者であった父と、熱烈な愛国詩人「スベランザ」として知られていた母の間に育ったワイルドは、アイルランドという土地の文化を十分に吸収しつつ成長していた。そして、Anglo-Irish の子弟が通う Trinity College Dublin で優秀な成績

を取めた後にワイルドはオックスフォード大学に進む。

オックスフォード進学は、よく知られている彼の言葉、“The two great turning-points of my life were when my father sent me to Oxford, and when society sent me to prison.”からも分かる通り、彼の人生の大きな転機だった。簡単にいえば、ワイルドはそこで（そして後にロンドンで）出会うイギリスの上流階級の人々と対等以上に付き合うために、表面的にはアイルランド人としての出自を隠した。アイルランド訛を捨て、イギリス人以上にイギリス的な英語を巧みに操り、彼らから一目置かれるダンディ、唯美主義者としてのアイデンティティを自ら作り上げていったのである。

この経験は、後にワイルドの作品に頻出する二重のアイデンティティというテーマの出発点になった出来事とも考えられる。彼の作品には、代表的な *The Picture of Dorian Gray*、*The Importance of Being Earnest* をはじめとして、二重のアイデンティティ、あるいは隠されたアイデンティティという主題を持つものが非常に多い。例として *The Importance of Being Earnest* の場合を考えてみると、この作品はアイデンティティを規定しているのは何かという問題を徹底してパロディ化したものと見ることができる。この劇の最後では、単に Ernest という名前が偽りであったというだけの理由で二組の結婚の夢が潰えようとしていたのに、偶然にも、本人すら知らなかった本名が実は Ernest であったという事実が判明し、全てが幸福な結末を迎える。クライマックスに差し掛かるところで出てくる“...would you kindly inform me who I am?” という台詞の馬鹿馬鹿しさの陰には、人の運命を左右するアイデンティティを規定しているものはいったい何なのか、という深刻な問題が隠れている。

そしておそらく、この問題をワイルドが痛烈に感じた最初の機会は、Irish/English の二重性を自ら演じざるを得なかったオックスフォード進学の時である。アウトサイダーとしてイギリスのエリートたちと交わっていかねばならなかった経験は、ワイルドの作品と実人生にしばしば見られる二重性・分裂の問題の原型になっているとも考えられる。Irish としてのワイルドに注目する研究は 90 年代に入ってようやく本格化した。その成果は、このような問題の理解も含めて、まだまだ多くのことを我々に教えてくれるものと期待される。

● 没後 100 年、そして 21 世紀

90 年代後半になると、世界中でワイルドの研究全体がさらに活発になった。理由としては、(1) 没後 100 年が近づいて再評価の気運が高まったこと、(2) Eagleton

らが文学理論・新しい批評概念を用いた先駆者として注目したこと、(3) 社会的な変化を受けて Gay/Gender 研究が盛んに行われるようになり、Wilde がその対象として注目を浴びたこと、などが考えられる。結果として、ワイルドの Irish としての側面に注目したものを含む多くの研究書が出されただけでなく、ワイルドに関連の映画や芝居が数多く作られることになった。(An *Ideal Husband* 等作品の映画化や伝記映画 *Wilde*、また、Wilde の裁判に関する劇 *Gross Indecency* (Moises Kaufman) がニューヨークで上演されて好評を博している。)

90 年代のワイルド研究の状況を把握するには、Melissa Knox の *Oscar Wilde in the 1990s: The Critic as Creator* (2001) がよい手引きになる。この本はワイルド研究の様々なアプローチを手際よくまとめているが、特に Knox が、今後の発展が期待されるのは Gay and Gender Criticism と Irish Ethnic Studies であると言っている点は注目される。ここでは、そこで論じられている研究の中から、特に Irishness に関係するものの例をいくつか見ておきたい。特に Knox も紹介している Jerusha McCormack, ed., *Wilde the Irishman* (1998) には興味深い論考が多く見られる。

● Davis Coakley, *The Importance of Being Irish* (1994)

題名から明らかなように、Irishness へ関心を中心に伝記的事実に基づいてまとめられた本だが、例えば *The Ballad of Reading Gaol* にはワイルドが子供の頃から親しんだ ‘The New Year’s Song’ の影響が強く見られるという指摘がある。他の影響はずっと早くから指摘されていたのに、ワイルドのアイルランド時代の歌の影響が 90 年代になってようやく指摘された点に注目したい。この面の研究はまだまだなされる余地があることを伺わせる。

● Neil Sammells, “Rediscovering the Irish Wilde,” in C. George Sandulescu ed., *Rediscovering Oscar Wilde* (1994)

ワイルドの Irishness のありようについて論じ、それを a “function of difference” that is “defined — not demeaned — by his English context.” と説明する。イギリス的な文脈の中で定義されて差異化の機能を持つというもので、他との比較によってこそ自らの位置づけ、すなわちアイデンティティが定まっていくという考え方は、後出の Kiberd に通じる指摘とも言える。

(以下は上記 McCormack, ed., *Wilde The Irishman* に含まれる論考)

• Declan Kiberd, “Oscar Wilde: The Artist as Irishman”

ワイルドの Irishness を正面から論じ、挑発的でありつつ説得力を感じさせる論文。“Wearing the mask of the English Oxonian, Wilde was paradoxically freed to become more ‘Irish’ than he could ever have been back in Ireland...”のように文字通り逆説的な言い回しを用いつつ、アイデンティティは“dialogic”であり、England と向かい合うことによってワイルドは自らのそれを確立していったという論を展開する。後のワイルドの Irishness 研究に大きな影響を与えている。

• Deidre Toomey, “The Story-Telling at Fault: Oscar Wilde and Irish Orality”

ワイルドの語り手としての才能に注目した論考。“an excellent talker”としての才能と Irish oral tradition の関係に注目したもの。ワイルドは、会話、童話など、書かれた物より語られた物の方が優れていたという指摘はしばしばなされているが、それを Irish の口承の伝統と結びつけて論じた点は大変興味深い。

• Alan Stanford, “Acting Wilde”

俳優・演出家の Alan Stanford による論考。特に Anglo-Irish であったワイルドの立場について興味深い指摘をしている。イギリスとアイルランドの両方で演出を手掛けている彼は、“Irish audiences have never understood Wilde.”と言いきり、それはアイルランドには貴族階級が存在しないからだという。もちろん、Anglo-Irish という上流階級はあったが、それは本来の “Irish identity” の内部に存在するものではなく、外部から押しつけられたものであり、従ってアイルランド民衆は本当の意味でのアイルランド上流階級という概念を持たない、と Stanford は考える。これは Irish といっても Anglo-Irish であるというワイルドの立場を考えるとときに忘れてはならない点だろう。English との比較以前に Irish/Anglo-Irish というアイデンティティの危うさの問題が存在する。人口の大部分を占める Catholic Irish と完全に自己同一化することはできず、しかしオックスフォードに行けばイギリス人エリートたちから Irish としてある意味差別される。そういう微妙な立場にいたということを思い出させてくれる主張である。

このように見てきただけでも、Irish としてのワイルドに注目してその作品を読み直してみることで様々な新しい展望が開けてくることが分かる。1990年代以降のこういった研究が明らかにしてくれるのは、ワイルドのアイデンティティは単純に English か Irish かという二者択一の問題ではなく、いくつかのレベルでそ

の両方の立場を生きていかねばならない複雑なものであったという事実である。それは English or Irish の問題というよりも、both English and Irish あるいは neither English nor Irish といった性質の問題であり、double なもの、hybrid なものといってもよい。そしてこの複雑さは、ワイルドの提示する種々の二重性の在りようを考える際にも大きく関わってくる。ワイルドの作品を読み直す際に、あるいは伝記的な研究を進める際に、この点をどう考えていくかは、今後の我々の課題である。

• Declan Kiberd, “Oscar Wilde: The Artist as Irishman”

ワイルドの Irishness を正面から論じ、挑発的でありつつ説得力を感じさせる論文。“Wearing the mask of the English Oxonian, Wilde was paradoxically freed to become more ‘Irish’ than he could ever have been back in Ireland...”のように文字通り逆説的な言い回しを用いつつ、アイデンティティは“dialogic”であり、England と向かい合うことによってワイルドは自らのそれを確立していったという論を展開する。後のワイルドの Irishness 研究に大きな影響を与えている。

• Deidre Toomey, “The Story-Telling at Fault: Oscar Wilde and Irish Orality”

ワイルドの語り手としての才能に注目した論考。“an excellent talker”としての才能と Irish oral tradition の関係に注目したもの。ワイルドは、会話、童話など、書かれた物より語られた物の方が優れていたという指摘はしばしばなされているが、それを Irish の口承の伝統と結びつけて論じた点は大変興味深い。

• Alan Stanford, “Acting Wilde”

俳優・演出家の Alan Stanford による論考。特に Anglo-Irish であったワイルドの立場について興味深い指摘をしている。イギリスとアイルランドの両方で演出を手掛けている彼は、“Irish audiences have never understood Wilde.”と言いきり、それはアイルランドには貴族階級が存在しないからだという。もちろん、Anglo-Irish という上流階級はあったが、それは本来の “Irish identity” の内部に存在するものではなく、外部から押しつけられたものであり、従ってアイルランド民衆は本当の意味でのアイルランド上流階級という概念を持たない、と Stanford は考える。これは Irish といっても Anglo-Irish であるというワイルドの立場を考えるとときに忘れてはならない点だろう。English との比較以前に Irish/Anglo-Irish というアイデンティティの危うさの問題が存在する。人口の大部分を占める Catholic Irish と完全に自己同一化することはできず、しかしオックスフォードに行けばイギリス人エリートたちから Irish としてある意味差別される。そういう微妙な立場にいたということを思い出させてくれる主張である。

このように見てきただけでも、Irish としてのワイルドに注目してその作品を読み直してみると様々な新しい展望が開けてくることが分かる。1990年代以降のこういった研究が明らかにしてくれるのは、ワイルドのアイデンティティは単純に English か Irish かという二者択一の問題ではなく、いくつかのレベルでそ

の両方の立場を生きていかねばならない複雑なものであったという事実である。それは English or Irish の問題というよりも、both English and Irish あるいは neither English nor Irish といった性質の問題であり、double なもの、hybrid なものといってもよい。そしてこの複雑さは、ワイルドの提示する種々の二重性の在りようを考える際にも大きく関わってくる。ワイルドの作品を読み直す際に、あるいは伝記的な研究を進める際に、この点をどう考えていくかは、今後の我々の課題である。